

第12回（令和6年度第5回）府中市生涯学習審議会会議録

1 日 時 令和6年11月29日（金）午後2時～3時50分

2 場 所 府中市役所おもや4階 第1特別会議室

3 出席者（敬称略）

(1) 委員12名

池田和彦委員、市村忠司委員、今関紘二委員、上野和憲委員、榎本成子委員、
佐野洋委員、白信康委員、田頭隆徳委員、立石朝美委員、長畑誠委員、
中村洋子委員、福田豊委員

※ 江崎章子委員、関川けい子委員、渡邊和子委員欠席

(2) 職員6名

佐藤文化スポーツ部長、平澤文化生涯学習課長、斎藤文化生涯学習課長補佐、
武居生涯学習係長、栗原主任、竹川事務職員

(3) 傍聴者1名

4 報告事項等

(1) 配布資料の確認

ア 資料1 第11回府中市生涯学習審議会会議録（案）

イ 資料2 令和6年度東京都市町村社会教育委員連絡協議会第5ブロック研修会当日資料（抜粋）

ウ 資料3 第11期府中市生涯学習審議会・答申案

(2) 前回会議録の確認

各委員に校正を依頼した前回会議録（案）について、市民に公開することが了承された。

(3) 令和6年度東京都市町村社会教育委員連絡協議会第5ブロック研修会について

当日の実施内容について会長から報告があった。12月に開催される都市社連協交流大会にて、会長から実施報告をする予定である。

5 審議事項

(1) 「これからの生涯学習を支える『公共』の役割について」

会長： 今日示した答申案について、細かいところまで意見を出してもらい、可能な限り文言も含めて決めていきたい。

次回1月下旬に予定されている審議会で答申を最終確定させるとい

うことになっているため、本日文言が決まらなかったものについては持ち帰り、正副会長でもう一度考えた上で、次回までに最終案をまとめて、お示しする。

資料3の答申案について、「はじめに」と「おわりに」については最後にし、まず中身について見ていきたい。

今回の審議会では、中間答申という形で昨年1年間話し合った内容を既に提出している。ただ最終的には、あくまで今回の答申が今期の審議会としての答申ということになるため、中間答申に今年度の内容を加える方向で進めてきた。

全体の構成としては、中間答申から大きく変える必要もないと考えたため、章立てそのものはあまり変わっていない。

1の「これからの社会環境」、2「これからの生涯学習」については、この1年間の状況の変化の中で数字を変え、また、少し文章を短くした程度の修正でとどめている。内容としては大きな変化はないが、この2つをまとめて何か意見があればお願いしたい。

委員： 1の「これからの社会環境」で「国際化」、「多様化」、「ITの進展」、「高齢化と少子化」という項目については、異議はない。感想になるが、「国際化」というのは、言葉としてはその通りだとは思いますが、私のイメージとは違う。「国際化」と言っても、府中では一番多い外国人は中国人であるという話があったが、日本全体から言うと、1番はベトナム、2番は中国、3番がフィリピンで、この3か国で半分を超える。ただ、今の円安の状況で、ベトナムの人にとっても、日本は魅力的でなくなってきていて、これからはミャンマーやネパールに移行していくのではないかという話もある。記載のとおり、労働力不足を補えるわけでもあるが、「府中市でも仕事や市民生活における国際的な交流も盛んになる」ということは、イメージしにくい。

例えば、これから30年後40年後に、府中市もスマートシティとなっていくと思われるが、そうなった時に今世界で一番技術が進んでいるインド、台湾などの人が来るのであれば、ここに書いてあるように、「仕事や市民生活における国際的な交流」となるとと思われるが、出稼ぎの外国人がたくさん来ると、治安の問題など、別の問題も懸念される。「国際的な交流が盛んになると考えられよう」というのは、イメージできない。

どういった表現に変えるのがいいという案はないが、これを読んだ人で同じように感じる人もいるのではないかと思う。

会長： ご指摘は確かにそのとおりである。「国際的な交流」と書くと、府中にいながらにして外の国と繋がるようなイメージが出てくる。この文脈でいうとそうではなく、身近にいる外国の方々との交流が盛んになるということである。外国の人たちとの交流も、それこそオンラインで繋がりやすくなるから増えていくと思われるが、ここの文脈の意図するものと

は少し違う。仕事や市民生活の国際的な交流ということで、こういった表現がいいか。

委員： 今指摘があった「国際化」については、私も気になっている。「多文化共生」や「多民族国家」という言葉を使った方がいいと思う。

50年後には外国人労働者が労働力の12.4%まで上がると言われている。単一民族でない人が5%を超えると、「多国籍国家」という表現になる。やはり「国際化」という表現は明らかに違うのではないか。

「国際化」の中にこの後段で言われてるようなありふれた日常の中、近所に外国人が住んでいるという状況を想定しているとしても、この表現は正しくはないのではないか。

外国人の増加が予想され、多文化共生で受け入れなくてはいけない、容認しなくてはいけない、共存しなくてはいけない、そうなると、教育、学び、市民生活もそれに合わせる必要があるということをきちんと書いた方がいいのではないか。

全体的に述べることは、この「国際化」、「多様化」、「ITの進展」、「高齢化と少子化」の4ポイントで良いと思うが、府中市の生涯学習を考えたときにどうかというところが、単なる分析で終わってしまっているように思える。

会長： 2段落目の「多様化」の中に意味としては入っているが、「多文化共生」ということを位置付ける必要があるかもしれない。

委員： 私はこの文案で良いと思う。今の発言も良くわかるが、「これからの社会環境」という一般的な高い視点から見た社会のすう勢を言っているため、私達の日常生活ばかりでなく、産業や企業などを包括した上での社会環境であるとすれば、やはり「国際化」という潮流があることは、この文言で何ら問題ないのではないかと思う。

今会長が言われたように、「多文化共生」という文言は使われていないが、下の方にその内容が書かれている。企業活動や産業活動とともに、私達の日常生活においても、そのような多様な関わり、つながりができるということが触れられているため、私はこのままで良いと思う。

会長： 2「これからの生涯学習」の2段落目に「国際化」や「多様化」に対応するのが多文化共生に関する学習」と書いてある。

ただ、社会環境の中で、「多文化共生」という言葉も入れておいた方が良く私も思った。「多文化共生」の視点を1の中にも少し入れる方向で考えたい。

この点も含め、また他の点に関して、1と2で何か意見はあるか。

委員： 私の視点からすると生涯学習の一番のポイントは、ＩＴの進展だと思っている。これは全てにかかってくると思っている。これから先の生涯学習を考えたとき、ＡＩの個別、最適な学習というものが進むと思う。

また、３０年後は府中市に住んでいる外国の方との異文化交流だけでなく、例えばＡＲやＶＲを使った環境で、ボーダーレスなコミュニティベースができるのではないか。今既にＳＮＳなどを使ってオンラインで国を超えてコミュニケーションを取ることができるが、ＩＴの革新によって、府中市にいながらにしてリアルコミュニケーションだけではなく、ボーダーレスなコミュニケーションというのが発生すると思う。ＩＴの進展によるものが、生涯学習として大きなポイントになるのではないかと思う。個人的にはこのＩＴの進展が第１手にあるべきだと思っている。

会長： 私のＮＰＯでは、インドネシアの小学校と、佐渡島と徳之島の小学校をつないで、環境教育の交流会を３年程やっていて、昨日が３回目だったが、まさにＩＴの進展があるからこそできたものだ。今は言葉の問題があるため、通訳を介してやっているが、これもＡＩの進展で今後は通訳なしで字幕が自動的に出てくるという時代もくるかもしれない。ＡＩの進展によって学びの場が大きく変わっていくということは確かだと思う。

「ボーダーレスなコミュニケーションが生まれる」というのはいい言葉だと思うので、何か入れられるとよいかもしれない。

委員： １の５段落目、地域社会の変化の部分は、「高齢化」と「少子化」ということがクローズアップされていて、世帯数は増えるということは確かにそうであるが、２ページ目の最後の２行のところで、「地域が伝統的に担っていた「共助」の機能が弱体化するだけでなく、世代を超えて受け継がれてきた様々な文化が衰退することに結びつく」とある。しかし、高齢化と少子化、単身世帯の増加とは直接には結びついていないと思っている。

高齢化少子化に伴って、小さな子どもと高齢者だけでなく、各世代が担う役割が今までとは変わってくる。この中には４０代も５０代も含まれると思う。高齢化だけが問題になっているというのが負担に感じる。文化センターも、一番来ていない世代は４０代５０代だった。

地域社会の変化の中で、高齢化と少子化に伴って、全世代の役割が変わってくる。介護をするようになれば生活も変わってくるし、ＩＴで在宅勤務になればまたそれなりに変わってくる。

色々なことが相まって、地域社会の変化が起こるのではないか、高齢化少子化だけでないのではないかと、思う。

会長： 今現在見られてきている変化で言えば、共働きが増え、昼間地域にいない人が増えてきている。その中で、そういう方々と地域の結びつきが

どうなっていくのかという課題はある。

40代後半から50代ぐらいの、要するに高齢者になる前の世代の人たちの役割についても、今前面に出されてないが、とても大事である。実はあるところでは、その世代を「後期現役世代」と呼んでいた。「前期現役世代」は子育てで忙しく、仕事も精力的にやらなくてはいけない。

「後期現役世代」になると余裕は出てはくるが、老いも忍び寄ってきて先の事が心配になったり、親の介護も入ってきたりする。そのような時代にどういった生き方をするかというのは、大事であると思っている。

これまで1に関する意見が多かったが、2の方は何かあるか。

委員： それぞれ色々な意見があると思うが、今回の本答申案は基本的には納得できるものであった。AIを含むITについては、短い期間で著しい進展があったが、ますます便利になる故に、人と人との触れ合いといったようなものが希薄になるのではないか。答申案ではその観点がわからないことはないが、触れ合いが希薄になるという表現を入れられたらいいと思う。

会長： 地域における人と人との繋がり、あり方も大きく変化している。良い変化もあるが、悪い変化もあるということだと思う。

2の「これからの生涯学習」については、まずは多文化共生的な話を出し、次にITとAI化の波に対応するという話、そして3つ目は社会全体がどんどん構造変化していく中で、それでも地域社会が大事になってくるだろうということで地域の再活性化という話、という流れになっている。

社会環境に応じて生涯学習も変わっていかざるを得ないというところで、多様化とか国際化に対応した部分と、ITやAI化に対応した部分と、社会の構造変化に対応した部分という3つに分けて記載しているということである。

では、次は4ページ以降の3「府中市の生涯学習が抱える課題」についてである。

特に4ページと5ページの前半が、2年目の審議会において見えてきたことを記載している。

まず、(1)として、今まさに話のあった、若い世代を含む多様な市民による新しい学習グループの形成にあまり寄与できていないこと、また、そもそも生涯学習センターや文化センターの存在や活動があまり知られていないのではないかとということ。

(2)も今までに出た話となるが、デジタル化の課題について。今ここでは「デジタル化」という表現が出てきたが、1と2ではIT化、AI化と記載していて、ここで急にデジタル化となっているが、どちらの表現がいいか。意味としては同じことを言っている。

委員： 括弧書きでIT化としたらどうか。

会長： 生涯学習におけるデジタル化あるいはIT化が遅れているという記載にしたいと思う。

(3)は府中では「学び返し」ということを行ってきたが、結局そのためには府中市内にどんな学習資源があるのか、学習に関わる人や組織があるのか、そしてそうした人達や組織とつながるにはどうしたらいいのか、という課題があり、その橋渡しをする機能が整備されていないということである。

(4)では、社会教育・生涯学習は色々な施設で行われているが、施設間の連携がまだまだ必要で、今までもこれからも大事な学習の拠点である学校との協働も足りないんじゃないかという課題である。

(5)は、前から言われてることだが、主体的に学びたい人たちへのサポート体制を強める必要があるという課題である。この5つの点について、意見はあるか。

委員： 文化センターの表記の件で、府中市の文化センターは高齢者福祉館や公民館など、複合的な施設になっている。学習活動に関係があるのは、地区図書館の部分である。文化センターの存在が生涯学習の学習活動と緊密に関係するというのは、あまり正確な表記ではないのではないかと気になっている。

後の記述に図書館が出てくるので、重複しているよう気がする。文化センターは、スペースはあったとしても、様々なイベントや自主グループなどの活動のために開放しており、学習活動とは全く関係ないとは言いきれないが、文化センターの生涯学習的な雰囲気、要素に絡んでの活動は図書館に集中していると考えられる。サテライト図書館のような役割をしている。文化センターの図書館については、そこが少し気になるため、重複感がある。文化センターの機能についての誤解を招くのではないかという気がしている。

会長： 確かに「公民館」という記載と「文化センター」という記載がある。これは統一しなければいけない。今の話の文化センターにおける学習という部分については、図書館も入っているということ。ただ図書館は図書館として記載してある部分もあるため、考える必要がある。お分かりだと思うが、文化センターには公民館機能があり、公民館そのものは社会教育・生涯学習の拠点であり、つまり貸館があるだけで市民の学習の場所となっている。したがって、文化センターにおける学習機能は図書館だけではないと思う。文化センター主催の講座もやっているため、それも学習機能だと言える。

文化センターの中の公民館としての役割は、主催講座をやるということと、市民の自主的な集まりや学習活動も含めて、学習ではない活動も

あると思うが、場所として提供しているということである。

委員： 3の「生涯学習が抱える課題」全般の文章のバランスのことだが、目的のようなものは大きく、抱える課題への言及が小さいような印象を受ける。

その中で学びということが強調されていて、確かに府中市の場合は、「学び返し」という言葉があるが、伝統的な学習として、絵を描きに行く、古典を読みに行くような、そのような趣味的な部分のサポートもする、個人を豊かにするというニュアンスが少ないと思う。その目的の中には、社会的に今後こう変わるからこれが必要だ、それを生涯学習の中に入れたらこういうことにつながる、というようなことなら納得できるが、生涯学習が抱える課題の中で、個人に対しての部分が薄くなっているのではないか。

会長： 4「これからの府中市における「生涯学習の拠点」の役割」の話にも関わってくるが、今の話で言うと3の(5)の部分では、「より主体的に学びたいと思う人たち」という部分に、個人で学びたい人も含まれている。そうした人たちへのサポート体制が足りないという表現になっていると思う。何々が必要だという目的のような表現で、何が足りないというふう書きぶりになっていないので、一部表現を変えたいと思う。

委員： 学ぶ個人といっても色々な人が増えているというニュアンスも足していくべきだ。共生的なニュアンスももう少しある方がいい。

会長： 多様な人たちの多様な学び、多様な市民というような表現も入れた方がいいかもしれない。

委員： 今の意見の、多様な市民の学びということだが、主体的学習者のサポートにどう関わって来るのか。

委員： 例えば、外国から日本にきた女性が、仕事や子育てをされていて、日本にいるから何かやりたいと思ったときに、何かサポートはないのか、と思う。海外の人が日本国民の5%くらいになるような頃にはそのような人にもサポートが必要になるであろう。

片言の日本語でも受けられる授業なのか、英語やタガログ語の授業をしなくてはいけないのか、どうなるかはわからないが、色々な人が色々な形で学びを知りたいと思う。そのボーダーラインを崩していく、バリアを取ってあげるといような課題も、生涯学習の中に芽生えてくるのではないかと思う。

委員： その通りだとは思う。ただ、今の思いをここに書き入れることが主体的学習者としての市民ニーズに応えるということに当てはまるのか。テーマや趣旨があまりにも拡散しすぎではないかという気がして、ポイントはやはり市民ニーズに応えるために、主体性を持った学びを支えるという、その中に今の話も全部含まれるのではないかと思う。国籍の違う主体的な学習者の人に対しても、もし壁があるとすれば、それを乗り越えるような乗り越えられるようなサポートをするということ。言いたいことはよくわかるが、全部入れると焦点がぼやけるのではないか。

会長： 今回のポイントだけを外に出して、(5)にもう1文追加するという手もある。色々な市民がこれから出てくる。そういった市民のニーズなり、こういうことを自分も勉強したいというようなものに応えられるような体制を作らないといけない。

委員： 生涯学習に関して、色々な手法やITなど課題は様々あるが、精神やハートの問題、人間の基礎的な面について今回は全然出てきていない。スポーツに関して、体力面とそういうものがないといけない。生涯学習に関して、それに耐えうる人間ができていないといけない。その辺りの話を付け加えた方がいいと思う。

会長： 今回の話は大人も子どもも含めてということか。

委員： 子どもには大人が指導していかなければならない。そういう生涯学習もある。大人も働きに出ている人はなかなかスポーツができないが、年配の人でスポーツをやる人が増えている。今サッカーをやっているが、一般の部の人数は減っているが、50代から70代の人が増えている。

今まで全然出てきていない部分は、考える前に体作りをした方がいいのではないかということだ。

会長： そうすると今の話はどこに入るか。

委員： 2「これからの生涯学習」の2段落目、「学び、学び合える場」という部分が、学びだけになっている。学びだけでなく、意識作りも必要ではないかということだと思う。意識作りも学びと言われればそれまでだが、学びという言葉がとても多くて、学びではなく、暇な時間をどういう風にしたいとか、興味があるからこれをしたいという、それを生涯細々とやっている、というような生涯学習の底辺の部分というのを言葉として組み入れてはどうか。その中で体作り、意識作りも学びと平等にあるというような気がする。

会長： 2「これからの生涯学習」の中に入れるのか、それとも3「府中市の生涯学習が抱える課題」の中に入れるのが良いか。頭を使って勉強するということ以外の部分で、体を使って覚えていくことも必要だろうし、それには芸術系の活動も入ると思う。もっと感性の部分を磨ける場というのも、いつの時代でも、これからも必要だろうということは確かだと思う。学ぶという言葉をもう少しより広範囲に広げてしまうという考え方もあるかもしれない。

入れられるとしたら、3(4)は連携についての記載になっているため、ここに体作り意識作りというところも必要だということを入れていくか、(5)の「市民の知的能力や創造性を高め」という箇所少し言葉を足すか。創造性という言葉には色々なものが入ってくると思う。

大事なポイントだと思うので考えたい。

委員： 今生涯学習の底辺の部分という話もあったが、主体的学習者というのは上の方の人だと思う。主体的に学びたいと思ってる時点で、意識が高い。主体的学習者でない人を、主体的な学習者にしていくという取組も必要だと思う。今のスポーツの話もそうだが、まずは受身で学習してきた人を主体的学習者に変えていく取組があり、主体的学習者になれば、それに対してサポートしていく。まずは主体的学習者の母数を増やし、その上で主体的学習者に対するニーズに応える内容を用意する、というような形に変えてもいいと思う。

会長： (5)の構造について、まずは主体的な学習者を増やしていく必要があり、基本的な話で体作りも大切というところに繋がっていて、その後、主体的学習者が増えたときにどう応えていくかという形にするのが良いか。今日文言まで決めるのは難しいので、こちらで考えまた示したい。

3については、まず(4)、(5)では何が課題かということがわかるように書きかえたい。

次に、多様な市民のニーズ、色々な人たちがこれから生まれてくるという視点を入れるということと、学びたい、そして学び続けられるような基盤作りについて加える。体作りや意識作り大事だという視点を入れる。表現については持ち帰り検討するという事で良いか。

(異議なし)

会長： 次に、4「これからの府中市における「生涯学習の拠点」の役割」については、前回も議論した内容だが、ハブとコンシェルジュに繋がる「多様な学びのコミュニティを促進する」という部分で、「多様な学びのコミュニティ」について定義を加えた。「市民が直面する多様な課題や生活上の必要性或いは各人の興味関心に応じて、自主的に学び、学び合い、人生を豊かにするとともに地域社会を創っていく場となる、人々の多様

な集まりのことである」という定義とした。

その上で、それを促進するためのハブとコンシェルジュという言い方にしている。

(1)のハブについては、前回どこまでできるのかという指摘もあったが、ここでは市内の多様な学習リソース（施設・組織・人材・活動等）を把握、データ化し、活用してもらうということとしている。

前回プラッツの団体登録の話で、データ化するということはある程度はできるのではないかと考えたのでこのような形で記載した。

さらには、そのネットワークの結節点となっていく必要があるということになっている。

(2)のコンシェルジュについては、前回の議論で、最後まで面倒を見ることが難しいという話もあったため、ここでの位置付けについても、相談者に最後まで付き合い支援するというのではなく、あくまで必要なリソースに繋げていくまでという書き方にしている。将来的にはA I の活用も考えられるとも書いている。

この4について、何か意見があるか。

委員： 前回議論になったコンシェルジュについて。先月、何年ぶりに国内のホテルに泊まったら、自動チェックイン機・チェックアウト機があった。昔はチェックインの時に色々な情報を書いていたが、今は予約するときにネットで情報を入力していて、お金も振り込んでいる。あとは自動チェックイン機でボタンを押せばルームキーが出てくるし、それをそのままチェックアウト機に入れば精算が終わる。そのとき、昔はコンシェルジュがいたのだと思った。

ここで気になるのは、学びたい人に対してリソースを繋げていくという役割が必要だという話だが、私は20年以上、生涯学習センターの講座を受けてきて、コンシェルジュのような人が必要だと感じたことは一度もない。

私が必要ないからとはいえ、他の人で必要な人はいるかもしれないため、ここに記載はあってもいいと思う。ただ、人はいないのではないかなと思う。相談したいことは、インターネットにアクセスすると大体答えが返ってくる。これは時々思うことだが、府中市の美術館、芸術劇場、郷土の森博物館などは英語表記がない。今では電車に乗っても、必ず行き先に日本語、韓国語、中国語、英語と順番に出てくる。

先ほどの国際化という話もあったが、少なくとも施設に外国人が来て、生涯学習について学ぼうと思っても、学びにくいと思う。

それに対応するとなった場合、人間が対応するのは大変だが、インターネットならできる。英語版、中国版、韓国版などができるのではないかな。

コンシェルジュの機能は私自身は必要でないが、必要な人がいるのであるべきではあるが、人材によって担われるのではなく、少なくともイ

ンターネットで全て解決するような、相談に応じる多言語のシステムを作り上げるのが良いのではないか。

委員： デジタルコンシェルジュという表現を使うのはどうか。

会長： 「人」がそこまでいらないかと言われるとそこまでは言い切れないと思う。答申では30年後のことを言っているとはいえ、新しい生涯学習センターができる時のことも考えないといけない。ただ、確かに人に偏りすぎていると思う。AIが何でも答えられるようになればいいのかもしれないが。

委員： AIが答えられるようにならなくても、検索システムで検索ができればいい。

会長： その検索システムの使い方を教える人がいないといけない。

委員： その部分は確かに人材が必要である。

委員： 使いやすい検索システムのプラットフォームになっていることは大事である。

委員： 最近オンライン学習ツールが進歩していて、1回学習すると次のものが自動で提案される。さらには学習した後の理解度テストも、正解率が出るだけではなくAIがフィードバックしてくれる。

「こういうところに気づいたのは素晴らしい、次はこれを学びましょう」といった形で、AIにフィードバック機能がついていたりする。とても革新しているので、コンシェルジュに当たっては、検索機能はベースだと思うが、おすすめを出すような機能もAIが得意とするところである。人材を揃えるというのも一定のニーズがあると思うが、「将来的には活用も考えられる」ということではなく、人とAIの両輪で、同時並行で進めていくのが良いのではないか。

委員： 確かに今は、AIやデジタルが活用されてるんですけども、私が今見守ったりしているご高齢の人々を見ていると、やはり人との繋がりを欲している方が多く、単身の人にとっては話し相手のような形で、コンシェルジュに相談に行きたいというような、安堵感も必要ではないか。人間の関係性の希薄化も問題になっているところで、人も必要だと感じる。

委員： デジタルに対応できる人とできない人の割合はどちらが多いのか。対応できない人も忘れてはいけない。

会長： 現在の社会の状況を考えて、これから5年後10年後ぐらいまでなら、アナログで対応しないといけないということもあると思う。そのバランスを取らなくてはいけない。

委員： 例えば、送ったメールに返事が来たとき、送った内容はそういう意味ではなかったのだがということもよくあると思う。やはり対面して一會話をするということは必要だと思うので、先ほど人とA Iの両輪でという意見があったが、そのような形で、人だけではなく、A Iだけではなく、両方で補っていくのが良いと思う。

委員： 私は元々A Iをあまり信用していなくて、嘘をつかれたり、色々痛い目に遭ったりしているので、基本はやはり人間活動だと思っている。

A Iというのは、パターンを学んでそれを結びつけるだけの機能しか持っていないので、基本は人間の活動である。その部分は強調してもしすぎることはないと思うので、ぜひ入れていただきたい。

これまで、例えば産業界では、CNCマシンという工作機械は熟練を必要としなくなるということを言われたこともあった。熟練度を数値化してインプットすることによって、熟練工がやることを機械が全部やるようになった。ところがそれによって熟練工がいなくなり、CNCに入れ込む数値のモデルがいなくなるという前提を崩してしまって、どうしようもなくなったという話があるが、それに似ていると思う。

やはり人間が基盤であり、主体である、根源であるという、そういうスタンスは必要ではないかと感じる。

会長： 学習する主体は人間であるということ。

委員： 私も対面がやはり重要だと思っている。この(2)コンシェルジュの文の中に、「相談を受け付け、必要なリソースに繋げていく役割」とコンシェルジュの役割が書かれているが、前は「学習グループの育成を含めて」という文言が入っていた。これはなぜ取ったのか。

会長： 前回、そこまでの役割は無理ではないか、大変ではないかという意見があった。

委員： それで抜いたということはわかった。

役割の担い手として、ファシリテーターがあり、前回はその後にはボランティアというのも入っていた。「学習グループの育成」という文言が無ければ、生涯学習ボランティアも対応できる。

会長： 生涯学習ボランティアの人が相談に乗るというのはA Iではできないことなので、復活するのはいいと思う。

委員： 人とA Iに関する話が出ているが、要は役割分担だと思う。A Iの方が効率的なものもあるし、先ほどの専門的な職人が教えるものや、微妙なさじ加減など、そういったものはA Iがまだシンギュラリティまでしていない。やはり職人的な部分や、極めて専門性の高い部分、人が教えるからこそ学習効果が得られるものといったような分野には人が必要で、一般的な検索などのA Iが担えるもの、それによって工数が減らせるものはA Iに任せるといような住み分けをすることで、より良い社会にしていけるのではないかと思う。

委員： A Iから離れて、4「これからの府中市における「生涯学習の拠点」の役割」については、以前から言っていることだが、生涯学習の拠点は、府中市の場合、1つではない。図書館がある。図書館協議会でも、生涯学習の拠点の自負を持っている。今の生涯学習の計画によると、図書館については、あまり記述がなくややバランスが悪い基本計画になっていると言える。将来的にその辺りが変わる可能性もあるが、それを踏まえても、「生涯学習の拠点の1つである」という表現にしておいた方が良いのではないか。ハブの1つである、コンシェルジュの1つである。将来的なこれからの発展、生涯学習に対する府中市の全体的な枠組みの変化だとか発展を踏まえると、「1つである」とするのが良い。

会長： 確かにその中でも4のタイトルにある「生涯学習の拠点」というのはどこを指しているのか、生涯学習センターのことを念頭に入れているのか、それとも、より一般的な生涯学習の拠点の役割か。どちらかというところ、これは生涯学習センターのことである。

委員： 我々はそう思っているが、諮問のタイトルが公共の役割となっている。かなり大きい問題設定がある。

会長： 4のタイトルに生涯学習センターを入れた方が良いのか。ずっと生涯学習センターを念頭に話をしてきた。「生涯学習の拠点の1つである生涯学習センターの役割」とするのは少し長い気もするが、この表現なら今の懸念はなくなるか。

委員： 確かに生涯学習センターについて検討してきたが、ここでは「生涯学習」を残しておいた方がいいような気がする。

会長： 4では生涯学習センターとして今後担う役割と書いてあるので、図書館も今後ハブとコンシェルジュの役割を担うにしても、違う形になるのではないか。ハブ、コンシェルジュの機能は図書館でもあり得るか。

委員： 図書館のレファレンスサービスはコンシェルジュの典型であるし、

色々な学習のための場を作ったり、講演会をやったり、サークルも支援しているので、十分その可能性はある。

会長： それでは、逆にタイトルはそのまま残しておき、最初の提案にあったように、本文の3行目に、「生涯学習センターとして今後担うべき役割」を、「生涯学習の拠点の1つとして今後担うべき役割」と修正する。

また、他の変更点としては、コンシェルジュ機能を人だけではなくてデジタルコンシェルジュと両輪でいくような形にし、生涯学習ボランティアもコンシェルジュの中に入れる。これで良いか。

(異議なし)

会長： 次に5「これからの府中市における「生涯学習の拠点」の機能」については、中間答申をほとんど踏襲し、その中でソフト面で前に記述がある部分を削除したのと、少し表現を変えた部分がある。

まず(1)は、「多様な市民が気軽に訪れることができ、学習の楽しさを実感できる」ということで、ハード面についての記載となっている。

(2)は、多様な市民が自由に使えるということ、(3)は、皆が集い相談できる機能、(4)はDX化を進めるということ、ここには少し学習リソースのデータベース化や講座のオンライン化、ハイブリッド化について加えている。

(5)は中間答申から変わっていない。ここはまさに、対面で必要な活動について記載しており、(6)はGXについて入れたので若干表現が変わっている。自然との共生を図れるような、ハード面でのGX化ということ で記載した。ここについて意見はあるか。

委員： 細かいことだが、(2)「活用度の高いスペースを利用者が自由にレイアウトを変えることができ、多目的に使うことができる部屋」という箇所だが、多様な学習ニーズに対して、活用度の高いスペースを設定し、多目的に使うことができる部屋ということ。「利用者が自由にレイアウトを変えることができる」という部分は削除するわけにはいかないか。

会長： そもそも「活用度の高い」とはどういう意味を想定していたか。

委員： 「活用度の高いスペース」というと、例えば階段状の椅子になってるところがボタン1つでフラットになるとか、パーティションの仕切りが防音度の高いものでできているとか、大きな広さの部屋が5部屋に区切れることもできれば、3部屋に区切れることもできるというようなものと理解している。

会長： 確かに、「利用者が自由にレイアウトの変えることができる」という部

分はなくても同じことが言える。

委員： 「利用者が自由にレイアウトを変えることができる」とあると、グループがやってきて、今日はお天気がいいからなどと言いながら自分たちで勝手にレイアウトを変えられてしまうような認識がある。そうではない。あまりにも具体的なのでここはいらないのではないかと思った。

委員： 先ほどの文化センターとの関わりで、文化センターにある地区図書館のことについても図書館協議会の方で議論しているが、とにかくスペースが狭いので、それを有効的に使うためにフリースペースを設けて、必要に応じてそこを区切って使うという話が出ている。例えば、読み聞かせのためのスペースが欲しいが、専用スペースを作るのは難しい。また、子ども専用の勉強スペースを時間に応じて拡大したいということもあり、狭いスペースを有効に活用するために、フリースペースで対応しようという話である。そういう話だと思う。

委員： 「活用度の高いスペース」ということは今現在の形で盛んに利用されてるという意味か。現在活用度が高いということなら、それを変えなくても良いとも考えられる。

副会長： 生涯学習センターの目的が固定されている部屋を見学するという機会があった。例えば楽器があるスタジオや陶芸しかできない部屋のことである。しかし、陶芸も残したいという声も一方にはあり、固定化された目的で作られている設備を、20年30年後のことも考えるということで、レイアウトを変えることができるようにしようということで記載したものである。

「活用度の高いスペース」という表現を使った理由は忘れたが、固定化された目的の学習のための設備は今後は不要になるという文脈だったと思う。現在の施設が固定された目的のための部屋が多かったため、20年30年後ということを考慮してこのような記載となった。

委員： 固定された目的と言うが、焼き物をするためには炉の温度が1200度、1400度にもなる必要があるため、その目的のために固定しないと危険が伴う。写真を撮る、絵を描くと言ったら自然光をどちらから取ろうかとなり、天井のカーテンが開閉できるような状態が必要となる。そういった生涯学習の基本的なものをやらないとなったときに、では公共の役割って何だろうと思う。生涯学習センターの中から絵画や写真、陶芸などを抜いてしまうということに繋がるのか。

副会長： 設備をなくすわけではなく、それしか使えない部屋を何とかしたいということである。そうしたものを含めて、今後の施設整備の表現方法と

してどのようなものが良いのか意見をいただければと思う。

委員： 例えば陶芸の窯のある部屋、スケッチするのに天井が開く部屋、写真のための薬剤が置いてある暗室で、それを避けて卓球を始めるなどとなるのは非現実的ではないか。

副会長： 非現実的なのでこの部分を削除するのも審議会の意見、意思として良いと思う。どういう表現が良いのか。

委員： いわゆる伝統的な生涯学習として、余生を焼きものをして過ごそう、絵でも書いて過ごそうと思う人がいて、それは施設を伴うものだが、府中市は手放すということか。

会長： そういう意見は出てはいないと思う。

「活用度の高い」というのは、今でもたくさん使われているという意味だと思う。ということは「現在活用度の高いスペースは保持しつつ、一方で自由にレイアウトを変えられることができる多目的に使えることができる部屋も必要」というように両方必要という言い方はどうか。

委員： 私は少し読み方が違って、「活用度の高いスペースにするために」と読んだ。多目的スペースを設定するということでもいいが、活用度の高いスペースにするという副会長の説明もそうだったと思う。

委員： 字を読んで如し、次にできる施設にはこういうものが必要だということを中心に盛り込む。現状ではなく、こういうものにしてほしいという提案なら、このままでもいいと思う。

委員： この文章で一番大事なのは、多目的に使うことができる部屋ということではないか。それに対して「利用者が自由にレイアウトを変える」ということは、今日来たらこう、明日来たらこう、と自由に変えられては困るのではないか。それは少し変だと思うので、この表現は抜いた方が良いのではないかと思う。

会長： 確かに結論として言いたいのは、多目的に使うことのできる部屋が大事であるということ。逆に言うと陶芸のスペースがなくていいとも言っていない。「多様な学習ニーズに対して、市民が多目的に使うことができる部屋」という表現とする。

委員： 「活用度の高いスペース」はそれに固定して更に活用度を高め、その他に多目的に使うことができる部屋も必要だということだと思う。

会長： 多目的に使うことができる部屋だけが必要とも言っていない。「多様な学習ニーズに対して」と書いているので、当然音楽や絵画、陶芸など、そういったニーズにはきちんと対応すべきだということを言っていると思う。ここで議論されたことが、新しい生涯学習センターを作る際にいかされるべきだと思うので、この議論自体はすごく大切だと思っている。

委員： 細かなことだが、DX化という表現は、私は何か企業の販売促進ワードのようだと感じていて、この答申の中に書き込むことにやや違和感があるが、この言葉は一般化しているのか。

会長： 前も出たが、IT化、AI化、DX化、デジタル化などの表現があるが、何に統一するのが良いか。

委員： 一般の民間企業で使っている言葉だと「デジタル化」という表現が一番意味は広い。デジタル化の中にAIがあるという形だ。DXという表現は今とても流行っている。DX業界は一番伸びると言われていて、これは技術そのものの表現ではなく、動きに関わる表現である。
ここでは「デジタル化」という表現を使うのが、包含できると思う。

会長： では、できる限り「デジタル化」に統一することにする。ただ「AI」という表現も必要な部分には入れる。

委員： 少し戻るが、4ページ3「府中市の生涯学習が抱える課題」の(5)で、1行目「既成の講座を受講するのではなく」とあるが、意味としては、既成の講座を受講しているだけではない、受講しているだけでは満足できないということではないか。

会長： 「受講するばかりでなく」、「受講するだけでなく」というような表現にする。

委員： 5「これからの府中市における「生涯学習の拠点」の機能」の(3)だが、施設内だけでなく外に向けたデジタルサイネージとは、具体的にはどういうイメージか。

副会長： これは、デジタル広告での宣伝やSNSやインターネットを通じた広報について意見があり、書き入れたものだ。デジタルサイネージは、くるるにある電子看板のようなイメージである。

市内各所に電子看板をつけて、市民に見えるようにするということがある。たくさん人がいるところに情報を出すということである。

委員： これはあまりイメージできない。例えば、駅に市の事業や今年の標語等を掲げてお知らせしているかという、それもしていない。それがいきなりデジタルサイネージで、しかも生涯学習だけが、というのは少し飛躍しているのではないかと感じる。

会長： ここでやることで府中市も少し積極的になり、他のところもやるようになるのではというポジティブな捉え方もできないか。

委員： そして実際的な問題として、中央文化センターと生涯学習センターが一緒になるとき、生涯学習センターの外に向けて、あの場所でデジタルサイネージをやっても、誰が見るのか疑問である。

会長： これは駅でやればいいのか。

委員： 感想から言うと、「デジタルサイネージ」という表現は馴染みのない方もいるかもしれないので、その表現は使わない方がいいと思う。

デジタルサイネージというのは電子広告のようなもので、ディスプレイを使ってどんどん内容を変えていくわけだが、効用の高いものなのかどうか。ここで取り上げるほど重要なテクノロジーなのか、私にはあまりわからない。

副会長： 代替案はないか。

委員： どういう機能を持ったものが必要なのか。デジタルサイネージのような機能なのか。

副会長： 施設内だけに閉じたような宣伝ではなく、普段から広く市民へ学習活動があることを広報するというのが目的である。ぜひ適切な表現をいただきたい。

委員： 難しい言葉を使うとき、注釈で載せるという配慮があるのではないか。

会長： では、「施設内だけではなく施設外でも目に触れるデジタルサイネージ(電子看板等)の活用」とすることにする。

委員： 5の(6)のGXは必要なのか。前回も色々議論になったと思うが、生涯学習センターが移転して中央文化センターと統合されたときに、どれだけのGXができるか。ここにわざわざ書く価値と、できる蓋然性と合わせたときに、本当に書く必要があるのか。ここまで考えているというポーズだけだったらいいが、実態が伴わなければ必要ないのではないか。

会長： 長い目で見てこれは大事であると言いたい、我々のこだわりの点かもしれない。府中はとても良い自然が残っていると思う。だからそこは大事にしなければならぬというところもある。

委員： 引っ越しせずに今の緑の中にいた方がG Xだと思う。

会長： 今回は無理だが、それこそ自然のある方に移すという手もあるのかもしれない。

では、6ページの「おわりに」について、今回の諮問は「公共」の役割についてということだったので、その部分をここに少し記載した。前回と変わっているのは、最後の方に「地域で定着することが、若い世代を含む市民が自分たちの地域に誇りと愛着を持つことにつながり、市の持続的な発展にもつながると考えたい」という文章を少し足している部分と、先ほどから話が出ている「府中市文化・スポーツ施設配置等適正化計画」について言及した部分である。

委員： 1段落目の終わりの方で「総合的に生涯学習事業をファシリテートしていく必要がある」という部分の「ファシリテート」という言葉が少しわかりにくいように思うので、ほかの表現はないか。

会長： 生涯学習事業は「推進」という表現を使うことが多いので、「推進」に変える。

委員： その少し前の部分で、「府中市はこの理念の下」という箇所について、「この地域に誇りと愛着を持つことにつながり、持続的な発展にもつながる」というこの理念は、特に府中市で公認されていないので、理念という言葉が良いのか。

会長： 少し大きく出過ぎている。「考え」とするか、「理想に向けて」という表現か、何も入れなくてもいいかもしれない。

委員： 「府中市は」だけでつながるのではないか。

会長： ではそうする。

委員： 最後の「本審議会の答申が活かされることを期待したい」と記載されているが、実現されることはあまり期待していないということか。

会長： そういう意味に読み取れてしまうかもしれない。「答申が活かされることを切に期待するものである。」はどうか。

委員： 強く出るのであれば「期待する」でいいのではないか。

会長： そのぐらい強く言ってもいいかもしれない。

では1ページ目に戻り、「はじめに」についてだが、これはこれまでの経緯を書いた部分だが、何か指摘等あるか。

委員： 5行目の「改めて検討すべき時期に差しかかっている」という部分は、「改めて検討すべき時期である」、「時期にある」でいいのではないか。既に遅れている部分もある。

会長： 「差しかかっている」という箇所を「時期である」と変更する。

委員： 1行目「生涯学習センターを生涯学習の拠点として」という部分は、先ほどの議論にもあったとおり、「生涯学習の1拠点として」とすると繋がると思う。

会長： そのように変更する。

委員： 2段落目の2行目、「30年後、40年後を見据えた」と記載があるが、次のページは「今後20～30年後」と書かれている。どちらが良いのか。

会長： 40年後は少し遠すぎるかもしれない。「20～30年後を見据えた」に変更する。

委員： 「30年後、40年後」か、「20年～30年後」という話なら、生涯学習センターできてから約30年なので、30年後がちょうど良いのではないか。

会長： 「30年後を見据えた」と、「30」と言って良いのではないか。ちょうど30年経つと府中市制100周年となりキリが良い。

また、最後に、答申のタイトルをどうつけるか。諮問事項の「これからの生涯学習を支える公共の役割について」というものをそのままつけた上で、副題、サブタイトルが必要かどうか。

今考えられるのは、生涯学習センターを中心に話をしてきたので「生涯学習センターのあるべき姿」や「生涯学習センターのあるべき姿を中心に」というようなサブタイトルをつけるのはどうか。

委員： 例えば前に出ていた「多文化共生とデジタル化に向けて」というようなもっと具体的なものが良いのではないか。デジタル化に対応することは避けて通れない。

委員： 求められているのは大きな枠組みで、「生涯学習を支える公共」ということである。しかし我々が主に話したのは生涯学習センターの機能である。羊頭狗肉とは言わないが、タイトルと違うことをやっているとというような批判を受けないためにも、サブタイトルで今会長が言われたような、生涯学習センターを中心にしたということをアナウンスした方が良いと思う。

委員： 元に戻るが、5「これからの府中市における「生涯学習の拠点」の機能」の(2)について、多目的という言葉で色々な意見が出たが、最終的に多目的という言葉を使う形になるのかどうか。

会長： 「多様な学習ニーズに対して市民が多目的にそれを使うことができる部屋」と直すということになった

委員： 元々は設備の比較をしてるときに、生涯学習センターが多目的に使えるところは少ないという意見が出た。なので、「多目的」は残るということで承知した。

会長： 今回のご指摘を元に、答申案に修正を加え、事前に送付し見ていただいた上で、次回最終回の審議会に臨みたいと思う。

6 その他

次回の審議会の開催時期について、令和7年1月24日（金）の午後3時から中央文化センター第2会議室にて開催することで、了承を得た。